

論文要約

野口寛樹

本研究は、非営利組織（NPO、特に本研究は NPO 法人を議論の対象とする）を運営する中で、どのように組織能力の基礎たる組織ルーチンが生成され、NPO 法人としての成長が可能となるかを考えることにより、その組織運営に対する貢献を行うものである。

日本の文脈では、NPO を経営学的な視点から分析する議論は多くない（澤村, 2006）。理念的なもの、個人に注目した議論はあるものの（Dimaggio and Anheier, 1990; 田尾, 1998; 桜井, 2002 など）、組織としての有効性、効率性を焦点とした、組織の活動、能力に関しては、その特殊性からくる評価の難しさのため、少なかったのである（小島, 1998）。

NPO としての活動が一過性のもので終わってしまえば、社会問題を解決していく主体、また具体的に何らかのサービス供給主体としての NPO セクターは、その社会的な信用を失ってしまう。そのため、本研究では、NPO の存在意義である、ミッションをその前提に、組織能力の基礎たる組織ルーチンに注目し（Feldman and Pentland, 2003）、その方向性、またその組織ルーチンが持つガバナンス効果（Coriat and Dosi, 1998 など）を議論しつつ、NPO における組織ルーチンの対象とされる活動を示し、その活動の根幹たるミッションを体現するリーダーの役割について考えることにより、NPO の成長について考察を行った。NPO の成長を考える中で、本研究で特に注目されるのは、“当初の参加動機と異なる活動”である。それは、想いをもち、“現場での活動”が重視される NPO の文脈では、“組織運営”に必要な組織ルーチンの生成、変動を考えることを意味する。

以上を考えるため、本研究では、京都府で認証されている NPO 法人の定款の分析、また実際の NPO 法人の活動に関する事例研究、また京都市 NPO 法人に対するアンケート調査より得られたデータを用い、実証研究がおこなわれている。

本研究の意義は、ミッションに導かれ設立された NPO 法人において、その成長の基礎となる組織ルーチンのあり方、意義について分析をした試みにある。NPO 法人の発展には組織運営に関する組織ルーチンの発達と十分な普及が必要である。つまり本研究はミッションを中心に、ミッションの体現者たるリーダーが組織ルーチンを生成し、そのガバナンス面を考慮しつつ、組織市民行動（本研究では NPO 法人の組織運営のための基礎となる活動＝当初の参加動機と異なる活動）を引き出し、組織ルーチン化すること、そしてその組織ルーチンを引き出し、組織として学習をさせ、組織ルーチン化を図る、教授的な手法をとる支援型リーダーの可能性について示唆している。

ミッション中心の活動を行う NPO、その組織参加の報酬・見返りが多様な組織であり、人々の自由意思に基づいて参加・退出が自由な組織では、問題解決、また組織として存続するためにミッションを中心とした組織ルーチンの生成、またそれに影響を与えるミッション体現者たるリーダーが必要となる。リーダーは組織運営に貢献する参加者が少ない中、いかに組織に対する貢献を作りこむのかが必要とされているのである。